

千葉省三童話全集

(第四卷)

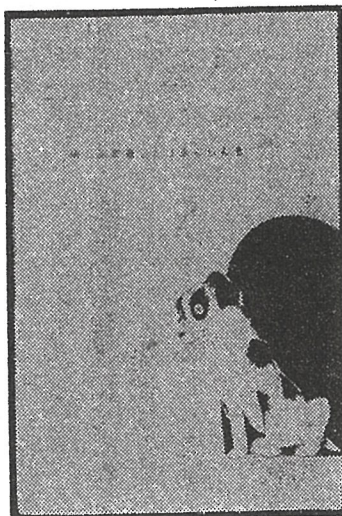
月報 4

目次

尊いイシブミ	山本和夫(一)
川上先生の絵	谷内六郎(三)
童画とは何か	武井武雄(五)

東京都文京区
水道 1-9-2

岩崎書店



右 ワンワンものがたり(昭12)
左 児童文学(昭10)の表紙、川上四郎画



童画について、ほか

月報タイトルは上記の如くであるが、今回は巻頭に山本和夫氏の文をいただいた。その後に本巻(ワンワンものがたり)にさし絵をお願いした川上四郎氏に因んで谷内六郎氏の「川上先生の絵」、また童画の草分けともいふべき武井武雄氏に「童画とは何か」という題で語っていただいた。千葉省三というと同時に川上四郎の名を思いおこすことが多い。雑誌『童話』以来、仕事の上でも私生活でもお二人は常にコンビをくまれていたようだ。川上氏は現在、越後湯沢にお住いで今でも千葉氏とはお互いに往き来されているという。

尊いイシブミ

山本和夫

千葉省三氏に関することは、これまでに、二、三回、小さなエッセイに書いた。

で、きょうは、少し変わった角度で書く。

千葉氏は、年譜によると、小学校教師を父に持っている。実は、私の父も、小学校教師だった。だから、私は、今まで千葉氏と親しくしていただいていたはいないが、何か、内輪の人といったような親近感を持っている。

もともと、千葉氏は一八九二年生まれであり、私は一九〇七年生まれ。私の生まれた時には、千葉氏は、中学二年で、柔道着を茶の帯でくるんで、宇都宮の町を闊歩していたのだから、世代の差があった。

けれど、大雑把にいうと、大正デモクラシーを、時代が準備しはじめていた頃と同じ産物といっている。

ところで、その頃の地方文化の拠点は、どこにあったのだろうか。

明治維新を通過した日本は、一八八九年に帝国憲法を發布し、その翌年、教育勅語をつくり、また、帝国議会を発令させた。

それから、日清戦争（一八九四年）日露戦争（一九〇四年）で血を流した。

この試練で、日本は、「世界的なもの」を、身を以って知った。その一つに先進国が叫んでいる「愛国心」があった。

もともと、日本も、江戸時代末期に、外国船打ち払いの令を出している（一八二五年）。しかし、これは愛国心の発動というよりは、中華思想の発動だったと思う。またこれは指揮者（江戸幕府）の政策で、国民の世論とは遠かった。

ヨーロッパ諸国、すなわち、先進国の人たちの叫ぶ「愛国心」が、日本の津々浦々に浸潤したのは、明治の末期だったといえよう。すなわち、大正デモクラシーは、この愛国心を、オブラートに包んで、右顧左弁しながら、前進をはじめた。その頃に、私たちが生まれたのである。

中華思想は、如何なる後進国でも核とすることができ。しかし、この「愛国心」は、先進国とその国の国民意識が対等になった時に、そのバランスを保つために生まれるものだと思は思っている。

日本の一般が、明治末期から大正にかけて、ようやく、先進国の愛国心と対等のそれを持ちはじめた。

その背景として、大正デモクラシーが発足するのである。

（もともと、千葉氏の作品を読むにあたって、愛国心のハカリは必要ではない。しかし、大正デモクラシーを実践する日本が、先進国と対等の意識を持ちはじめた例として述べたまでである。）

——ところで、この運行の地方的拠点は、どこにあったろう



最近の千葉省三氏 津田塾大学の校庭にて 昭和42年11月

か。

その拠点は、黒いランシャの詰め襟の洋服を着、鼻の下に、ヒゲ（美髯）を蓄えた小学校教師のグループにあったといっている。小学校教師の息子である私の思い出を手繰るとこの線が出てくる。

（その頃の教師は、聖職に従うという誇りを持っていた。それが、単に教育技術者であるという自覚の他に、文化の担い手であるという誇りに繋がっていた。）

さて、この地方の文化の旗手たちが、その頃、新しい世界的なものとして捕えた電波が、スウェーデンのエレン・ケー（一八四九—一九二六）の

「二十世紀は児童の世紀だ」

という、表はやさしいが、中味は鋭い声だった。次に聞こえてくるのは、アメリカのプラグマチズムの大成者、デューイの声であった。

千葉氏の尊父は、どういう思想の教育者であったか、どうか知らない。しかし、どういう思想を持っていたとしても、この新しい声が耳にひびかなかったわけではあるまいと思う。何故なら、その声は、時代の新しい声だったからである。新興日本の旗手たちの耳は、（その頃は）新しい声には、敏感だった筈である。

千葉省三氏の作品は、その新しい声の落とし子だと思っている。小学校教師の子どもは、千葉省三だが、新しい声を聞いた地方の文化の旗手の子どもが、千葉省三氏の作品なのである。だから、その作品は、尊い時代の碑（いしぶみ）であると私は

思っている。

私の作品にしても（千葉氏の作品と並べたらば、不遜の誇りを受けるだろうが、しかし、）十五年遅れて、汗をふきながら駆けている、その声の落とし子だと思っている。だから、私は、千葉氏に、親近感を抱いて、その作品を愛読している。（児童文学者）

川上先生の絵 谷内六郎

川上四郎先生の絵をぼくが見たのは、主に少年雑誌の口絵とかさしえです。川上先生が大正六、七年頃から子供の本に描いておられたことはずっと後で知ったことで、ぼくが知ったのは主に雑誌です。

山々と調和したようにある子供、また、子供の山村での生活、描かれたものはみんな日本の農村漁村の子供と風物です。これだけ日本の風土に徹せられるということはよいでないお仕事だと思えます。

ここで生意気な「論」を言うと、川上先生の初期の印象主義からセザンヌは、そして、日本の土俗的なものへの追究、そしてピアズレーの消化、それは普通考えるほど単純でない、単純素朴でないあらゆるものを通過されて独自の単純化に深め、昇華して行かれたことは、その作品の過程を拝見すれば解けます。

川上先生が一番大きな業績は一貫して貫ぬかれた日本の「土」と言えはいいか、日本の風土、生活、を描ききったというすぐ

れた業績だと思えます。だいたいモダンな気風とか流行に合わせるようなことはしないで、むしろそんなものの生まれて来る西洋の歴史の土台をすっかり見ておられているので、うわべだけのモダンやはやりはけっして描くことをなさらなかった面が感じられます。本質をつかんでおられたので、いつも絵がどんな時でも新鮮に満ちておりました。勿論その本質というのは東洋西洋共にある、人へのやさしさといえますか人情といえますか、『人道主義の強い祈り』が先生には一貫してあったのだでしょう。どの絵もいつも新鮮で時代を感じない、越えたものがあるのはかなり強固な人道主義の心がある方だと、ぼくはぼくなりに思っております。

川上四郎先生の絵を通して絵かきさんは、現代の三十五才以上の絵かきさんにはおそらくいらないと言っても過言ではないでしょう。それは幼い時、少年の時、多くの感覚として心のふるさとのようにある「絵」です。

だれの心の中にもあるふるさとで、やがてはまた、そこに帰りたい母のふところのようなぬくもりのある「絵」だと思うのです。

また、川上先生の描かれる子供達はみな農村の漁村の普通の勤労者の健康な子供が多く、先生の視点はいつも大衆の、それも勤労生活者に限りない愛情がそそがれているということも、いかなる時代が来てもその人間性は新鮮であり、未来に確実に残る業績を残されたと確信するものです。

一部の児童文化運動発達の面で、都会の、それも中流以上の消費生活者の子供をいかにも外国風に描いたものも昔は多く

で、それをモダンだとかハイカラな気分と味わったのか、そういう派を賞讃する識者も多いが、ぼくはそれは未来につながるものがない、上を流れる薄っぺらな文化のような気がしてなりません。しかし、今となってみればそれはそれなりの役を果したようです。でもぼくは日本の「土」、日本の「風土」、日本の「歴史」、日本の大勢の人、つまり歴史の中の「大衆」を描いた人の『人間性』を失なった時に、日本は民族を失なってしまふものだと思えるのです。未来に世界国家が生まれれば、より強固な民族性はそれぞれ個性として尊ばれるものです。そういう意味でも川上四郎先生の業績は未来に光茫を放つものと確信しております。(画家)

童画とは何か 武井武雄

童画という言葉はまだ四十四、五年の歴史しかもっていない。童画とは何を意味するか、私が使いはじめた言葉だからそれに答える責任があるような気がするのである。

大正中期の児童文化復興期はまず文学からはじまった。お伽噺が童話となり児童文学のジャンルが確立の緒につくと、勢いそれに対応出来るような画も必要となってきた。つまり文学が先行して画があとから再認識されるようになったこの時間的な差が錯覚を起す原因になって、画は挿画であり、文学の隷属物かのように思われていた。童話挿画、童謡画などと呼ばれていたのはその為である。なるほど挿画というケースはその機会が多かった事は事実だが、これは画の用途の一つに過ぎないので



千葉氏のモービル児童文化賞受賞式で祝辞をのべる川上四郎氏 昭和42年5月

あって、子供に与える画の本質は決して文学と主従関係にあるものではなく、絵画という独立した美術として存在すべきものだ、という事を主張したいばかりに、大正十三年に個展を試みた。この時のタイトルが武井武雄童画展というのであったが、この童画という作語がはじめてだったので、イチャモンつけてくるおじさんがあった。「表に童画と書いてあったがはいって見るとこれは大人の描いたもんじゃないか、けしからん」というのである。「まあ待って下さい、大人が書いても子供が書いても童話という。童謡だって同じ事だ、それとドウヨウだ」と答えたなら「なる程そう言われるとその通りだ」と納得してお引上げになった。それ程めずらしかったわけである。後年になってもまだ大人の描いたものか子供の描いたものか、の判別が童画という言葉からつけにくい事例が当分跡を断たなかった。字義は同じだが子供の描く方のは児童画という言葉で区別するよう慣用されている。石井柏亭さんが生前に童用画という言葉を考えて、あまりにドライな語感である事と、童謡画と同一に聞こえてしまう事とで、どこでも一度も用いられた事がなかった。そう言えばアニメーションの動画というのも発音だけで聞いているとまぎらわしい。

童画という言葉も昭和三十四年になってはじめて国で公認された。この年に貰った紫綬褒章の褒章の記に童画と書かれているからである。童画とは何か、一言でいえば子供に与える目的で描かれた画の事に外ならない。その意味からは児童漫画だっというのの中の一つのジャンルであり形式である。中には童画というのメルヘン的なものを指すと感違いして、童画的なとい

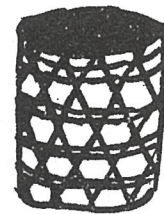
うような表現をしている人もあるが、これは画の傾向だけの事であって、童画という言葉は決してそんな狭義なものではないのである。

さてそれでは童画の目ざす究極的な目標は何かという事だが、その使途を考えると複雑で多種多様と言えるが、結論から先に言ってしまうと、「人的感応」をもって最後のものと考えたい。人と人との繋がり、人間的影響の事である。こんなところまで必要としない童画も沢山にあるが、それ等は単にモノを教える為の道具であつたり、理解の面に役立たせる図解的の手段に過ぎないものである。つまり図の方に近いものであつて技術で足りると言つてよろしい。一方精神感動の伴うものからが芸術であり画という事になる。この段階になつてはじめて人的感応の問題が起こつてくるのであつて、「芸術は人なり」という古い言葉はいつになつてもやはり生きてゐる。子供の眼の前期の時間を消費する娯楽対象で済んでしまふのだが、幼い魂の奥底まで喰ひ入つて、これを呼び醒まし、育て、希望をもたせ大人になつても、まだ執拗に喰ひさがつていようというためには、これこそたつた一枚の切札があるだけ、それが「人的感応」である。

さてそこで人間誰だつて一応の個性はあるのだから、作品には何も勉強努力しなくても自然にそれぞれの人的感応が生ずる筈じゃないか、と考えるかもしれないが、大事なはその処である。なる程その通りであればこそ童画では安つぽくくだらぬ人的感応の生ずる事が何よりも怖いのである。

画の基本勉強よりも何十倍かむつかしいのが人間の勉強である。人間の深さ、大さ、人間らしさ、それ等が人的感応の出る源泉となる。これを思えば童画の道のむつかしさ、険しさ、高さに絶望し歎息する事屢々である。人間的な高さなどというようなものは教養ぐらいのなまやさしいものでは得られないからである。これは童画に限つたものではなく文学、音楽等すべての芸術について回る条件で、人と魂の繋がりがもてないようなもの、心の迫力、エスプリのない本などは唯印刷された紙に過ぎないものである。(童画家)

よりだぼくお ……川上四郎



あき地

千葉君の家の隣りに、百十坪ばかりの空地がある。畑のうねも見えるようだけれ共、何しろ草が一ぱいで、どこから畑なのかわからぬ位だ。

千葉君は初めこの空地の奥の方の隠居家の建つてゐる処と一しよに二百坪あまり借りたのだが、前側は地面もひくいし、街道にも近いし、おまけに電信柱が邪魔になつて、家が建てられそうもないものだから、そのまま、空地にして、ほつたらかしてあつたわけです。でも地代は払つてあるのだし、ただ遊ばせて

雑誌「童話」の愛読者で、その編集後記ともいうべき「おぎくぼだより」を特に記憶しているという方が多いようです。千葉、川上両家のたつたずまいや私生活の一面などもでてきて、読者にとっては、作者に限りない親しみを感ずるものでしょう。その中から二篇だけ川上四郎氏に選んでいただきました。

おくのは馬鹿らしいな」と書斎の窓から頸をのびして眺めては考え込むのです。

ほんとに馬鹿々々しい話です。どうしたらこの空地が、もっとも有利につかわれるかと考えてあげない事もないのですが、名案が浮びません。しかし矢張り一番真剣に考えてゐるのは借りぬしの千葉君なのです。千葉君は親孝行者なのです。二百坪ばかりのうち、奥の日当りの好いところへ、隠居家をこしらえてあげたのです。けれども隠居家に二百坪は広すぎると思つたのでしよう。九十坪ばかりを区切つて垣根をつくりました。そこで余分のところは空地になりました。

さしあたり、畑をつくつて見ることにしました。しかし、たいたみのりもありませんでした。もっとも草もとらず肥料もやりませんでした。実はそういう事は面倒くさかつたからです。

ある人が千葉君に教えました。草が生えたら山羊を飼いなさい。山羊は可愛いもんですよ。その草でそだちますよ。そしておいしい乳を与えてくれますからね。千葉君は大変よろこびました。なるほどそれにしよう。いい事を教えてくれたと思ひました。しかし、いつになつても山羊の姿は見えませんでした。実は山羊を買つて来るのが億劫なんです。

ある人が千葉君に教えました。桐畑にした方がよからうじゃないか、それで御嬢さんの嫁入算筒が充分出来ますよ。

また、ある人は、肥料をうんとばらまいておくんですなあ。すると、隣の屋敷の竹がのびて来て節がどっさりとれますよ。ある人は豚や鶏を飼つてはどうかと教えてやりました。

どれもこれも結構な事でした。しかし、どれもこれも面倒くさくありました。

草花をつくつてはどうですとすすめてくれた人がありました。千葉君もこれには大変気のりがしたようでした。しかし、ひる過ぎになつてようやくのそのそ起きて来る先生の花畑には果してどんな花が咲く事でしょうか。

よわむし

「何だい、また病氣してるのか、どうしてそう弱えんかなあ。」千葉君にこう言われるときまりの悪いような、申訳のないような、小癩にさわるような氣もして来るが、まったく見かけによらぬ弱虫に違ひはないので何と言つて見ようもない。冬は風邪ひき、夏は腹こわし、春と秋とが神経衰弱、これじゃ年がら年じゅう病氣の絶え間が無いという訳だ。

同病相憐れむで、病氣した時は矢張り病人仲間の方が話がある。「イヤ此の間は一週間ばかり腹をこわして閉口したよ」「私もさ」「ハハア同じだ。困りますねエ」と言つたような具合。ところが隣の千葉君と来たら、これはまた無類の丈夫ものと言つても好い程の頑健さ。

「どうしておめえ等はそう病氣ばかりしたもんだかな。しょうがねえじゃないか。誰んどこへいっても満足な奴が一人もいねえじゃないか。」などとひやかされる。あんまりやられると弱虫どもも小癩にさわるものだから、あいつ一べん病氣にして見てえもんだなんて事になる。千葉君もこれには閉口したと見えて、非道い事を言いやがると言つてた。

その千葉君も当年は、春頃少々病氣をし、そのほか病人さわ

ぎで大分なやまされたので、人ごとでなくなったらしい。
「イヤ、この頃頭が痛くてとても仕事が出来ない。運動が足りないのだから、君とテニスでもやろうと思ってやって来て見たら君も居らずさ」なんて言ってくるようになった。(以下略)

補足と訂正

(編集委員会)

本全集第二巻の解説中、二一九頁四行目の「当時はプロレタリア文学の勃興期で」に始まる五行を、より正確を期する意味で、次のように補足訂正いたします。

「省三、朝彦氏らの童話が批判攻撃されたのは昭和四、五年のプロレタリア児童文学の勃興期で、作品批評で直接名ざしの



雑誌「童話文学」昭和四年十月号
川上四郎氏による表紙

攻撃をしたのはアナキズム派の雑誌『童話の社会』の童話時評でした。コムニズム派の『童話運動』誌も、榎本楠郎氏らにより童心文学否定の論陣を張りましたが、榎本氏が『新児童文学理論』を出版した昭和十一年頃には、情勢が変わり、同氏も省三、朝彦氏らの「童話作家協会」に参加、多くのリベラルな作家たちとの統一戦線の立場に立っていました。」

〈新装版の読者へのお断わり〉

この月報は、初版発行時に挿入されていたものです。ですから、執筆者のなかには鬼籍にはいられた方もいますし、勤務先、肩書が現在と変わっている方もいます。そのことをお断わりします。

なお、初版第一巻の刊行は昭和四二年十月で、以後、巻数順に毎月一冊出版され、昭和四三年三月に全六巻が完結しています。

(岩崎書店編集部)